

# 山梨県屋敷平遺跡における縄文時代晚期終末のアワ・キビ圧痕

中山誠二（山梨県立博物館）  
佐野 隆（北杜市教育委員会）

## はじめに

筆者らは現在、レプリカ法による植物圧痕の調査を通して中部日本の内陸地域における穀物栽培の起源を探る研究を開いている。その一連の研究の中で、山梨県内の縄文時代晚期終末期とされる浮線文土器段階の土器に多くのアワ・キビの圧痕が付着していることが明らかになってきた。その一つである韮崎市中道遺跡については既に報告を行なったが、全体の62%がキビ (*Panicum miliaceum L.*) ないしキビ近似種 (cf. *Panicum miliaceum*)、12%がアワ (*Setaria italica Beauv.*) ないしアワ近似種 (cf. *Setaria italica*) の比率で圧痕が検出されている（中山・閨間 2012）。これらの穀物の比率は遺跡間で違いが認められるものの、中部地方でかなりの広がりをもっている事実も判明してきた。

本稿では同時期の北杜市屋敷平遺跡の土器についての分析結果を報告するとともに、当該期のアワ・キビなどの小粒穀物と稻作の拡散に関して考察を行っていきたい。



第1図 屋敷平遺跡位置(1/2500)

## 1 遺跡と圧痕土器の概要

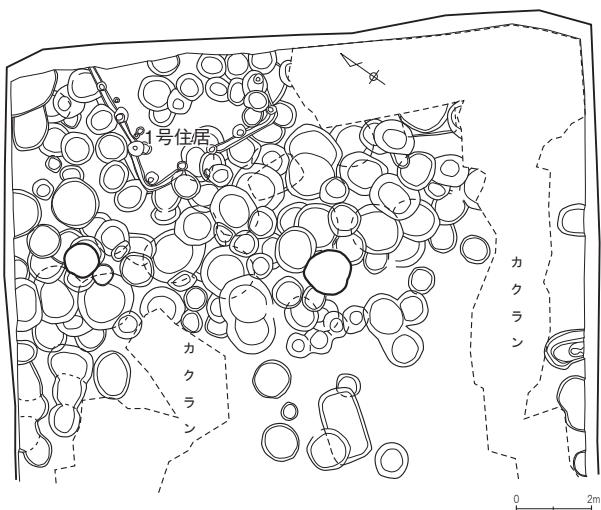
山梨県北杜市白州町台ヶ原に所在する屋敷平遺跡は、平成17年に768m<sup>2</sup>が発掘調査され、縄文時代晚期末葉の住居跡1軒、土坑200基ほどが検出された（第2図）。遺跡は、釜無川と尾白川にはさまれた、岬状に細長く延びる微高地の先端部、標高560mに位置している（第1図）。遺跡の南東720mに現在の釜無川と尾白川の合流点があり、遺跡と釜無川との現比高差は約25m、尾白川との現比高差は約15mである。尾白川は、縄文時代前期から平安時代にかけて流路を変えながら氾濫を繰り返し、扇状地地形を形成したことが確認されている。屋敷平遺跡が立地する微高地には縄文時代中期末葉の集落遺跡があり、縄文時代中期以降、釜無川、尾白川の水害を被っていないらしい。

屋敷平遺跡の北東5.5km、標高770mの八ヶ岳南麓に金生遺跡が知られる。東に小河川東衣川が流れる尾根筋に立地する。屋敷平遺跡の北北東2.5km、長坂町中丸の健康村遺跡では、屋敷平遺跡とほぼ同時期の埋甕、竪穴状遺構、土坑が検出されている。大深沢川と小深沢川に挟まれた標高750mほどの幅広い丘陵に立地し、金生遺跡と同様、屋敷平遺跡の立地環境とは異なっている。こうした立地環境の比較から、屋敷平遺跡が水量の多い河川を指向していた可能性がうかがえる。

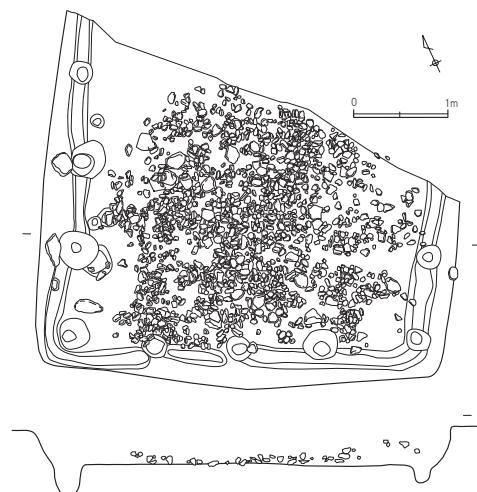
屋敷平遺跡の性格は、調査面積が限られ十分に把握できない。現時点でいえるのは、配石遺構を伴っていないこと、土坑が多いことなどであるが、なによりその立地環境に注目したい。

屋敷平遺跡1号住居は一辺4.3mほどの方形竪穴構造で、壁沿いに柱穴と周溝が巡っている（第3図）。砂質の地山にあたる床面は軟弱で、床面上には焼けた小礫が敷き詰められていた。1号住居周辺で密集した土坑が検出された。土坑は径80cmから1mほどの円形かやや楕円形で、底面は壁際が高く、中心部がやや深い。これらの遺構の出土土器から縄文時代晚期末に位置づけられる。

今回分析を行った土器は、主体は浮線文と細密条痕文を特徴とする縄文時代晚期終末期の土器であるが、YSD03、YSD05のような弥生時代前期後葉段階の条痕文土器もわずかであるが認められる（第4図）。氷I式とした深鉢の中には、口縁部に平行する多段化した浮線文をもつYSD09、胴部中央部に浮線文および瘤状突起を施しその下部に細密条痕を持つYSD19、肥厚した口縁部に長楕円形の口外帶をめぐらせ凹部の接



第2図 屋敷平遺跡全体図



第3図 1号住居(1/80)

点を小突起状に残すもの YSD01 など同型式の中でも古相を示すものである。浅鉢では、口外帶を持たず頸部無文帶が未発達で、細長い眼鏡状浮線文と瘤状突起をもつ YSD04・YSD14・YSD15 など離山式段階に遡るものと、YSD06 のように口外帶、頸部無文帶が発達し四分岐浮線文をもつ氷 I 式中段階に位置づけられるものなど若干の時間差が認められる（中沢 1998）。

## 2 試料の分析方法

本研究では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡（SEM）で観察するレプリカ法と呼ばれる手法を用いる。

土器圧痕のレプリカ作成にあたっては、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎・片多雅樹氏により、多量な試料を迅速に処理できる手法が開発されている。今回用いた手法は、『土器圧痕のレプリカ法による転写作業の手引き（試作版）』による（比佐・片田 2006）。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分の実体顕微鏡での観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の初期充填、⑥走査電子顕微鏡用の試料台にたシリコーンを載せ、初期充填を行った圧痕部分にかぶせ転写、⑦これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から離脱、⑧走査電子顕微鏡（日本 FEI 製の Quanta600）を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂（パラロイド B - 72）をアセトンで薄めた 5% 溶液を用い、印象剤にはトクヤマ フィットテスターを使用した。

## 3 同定結果

### YSD01 (第5図 1~4)

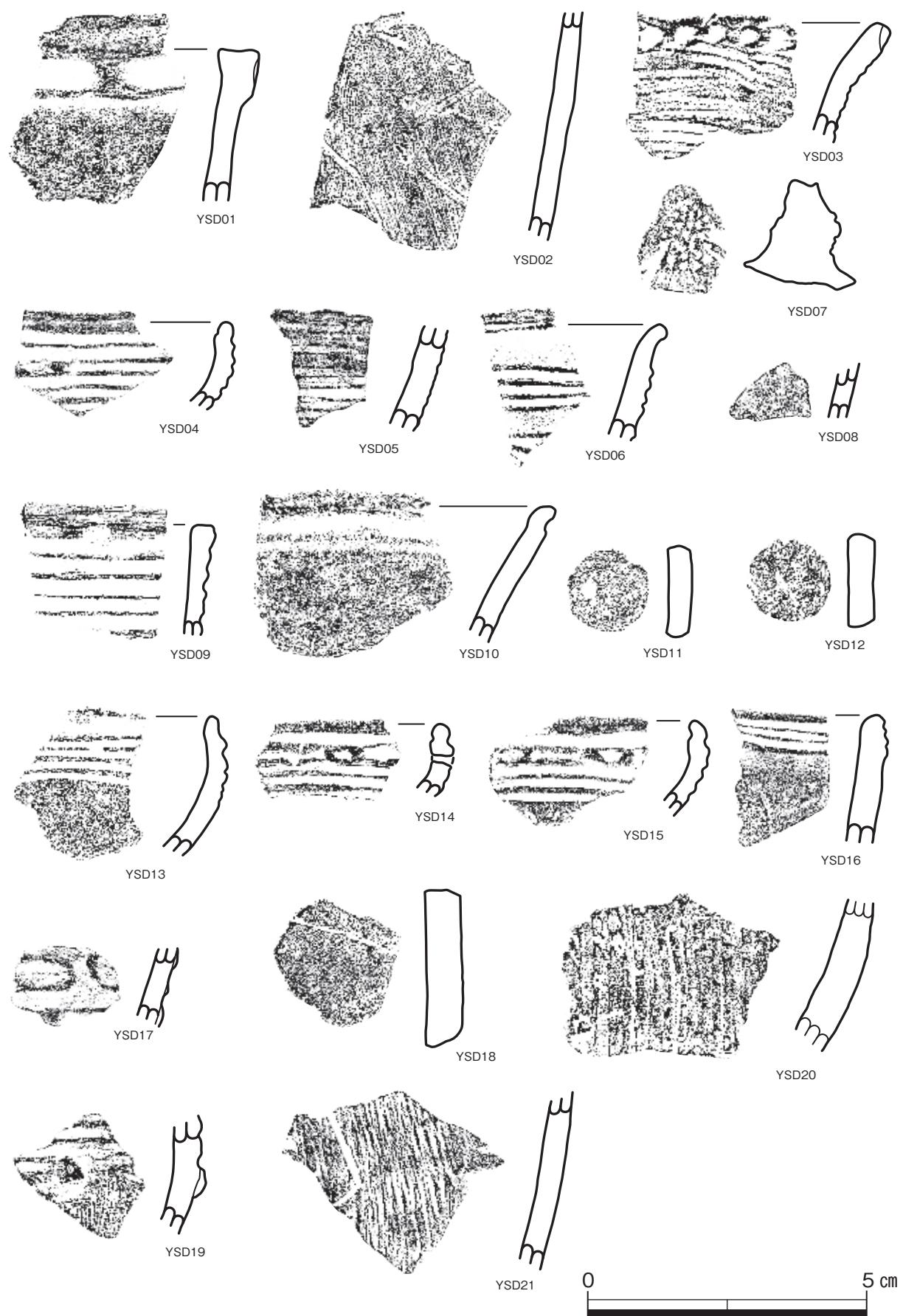
口縁部が肥厚し、長楕円形の口外帶がめぐり、凹部の接点は小突起状に残される深鉢。口縁部内面から植物圧痕が検出された。

圧痕は、長さ 2.1mm、幅 1.3mm の植物種子である。平面形状は細長い楕円形を呈し、頭部が球形で基部が細くなる。不明瞭ながら、外頸部と内頸部の接する段差が認められる。形状や大きさなどからエノコログサに類似するが、表皮細胞が不明瞭であることからエノコログサ近似種 (cf. *Setaria viridis*) とする。

### YSD05 (第5図 5~8)

口縁部下に胴部に条痕文を施す深鉢土器。胴部内面に圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 1.9mm、幅 1.6mm、厚さ 1.5mm で、全体に丸みを持ち、基部がやや尖った球形を呈する。また、



第4図 屋敷平遺跡出土土器